

### 講演3 「よみがえれ！門前町のにぎわい～お宮横丁とまちづくり～」

佐野元産氏 （株式会社きたがわ お宮横丁）

改めまして、「ようこそ富士宮へ」という歓迎の言葉を述べさせていただきます。はじめにこのお話をいただいた時に、学芸大にお邪魔してお話をさせていただくということでしたが、企画が現地を見るというように変わったということで、大変すばらしいことだなと思いました。何を言いたいかと申しますと、百聞は一見に如かずということです。若い頭脳で、体力やエネルギーが有り余っている学生の皆さんに、研究の課題である、先を見てもらうことが一番手っ取り早いということなのです。今回私は、前のお二方の話を踏まえて、どういう風に町づくりに関わってきたのかという事を話させていただきます。

#### 門前町とお宮横丁

ツアーで皆さんがお昼ごはんを召しあがった場所が、お宮横丁です。あそこは約 200 坪の土地です。三年半前、平成 16 年の 4 月にオープンしました。それまで、まちの電気屋さんと、パチンコ屋さんがありまして、シャッターが閉められていました。全国的に商店街の疲弊ということが言われています。地域と周辺との格差社会が問題となっていますが、その中で富士宮の市街地である商店街でシャッターが目立つようになりました。全国的な流れとまったく同じ状況がしばらく続いていました。

もともと富士宮には、まず富士山と言う横綱クラスの、日本人なら誰でも、また世界中のほとんどの人が知っているくらいメジャーな財産があります。その麓にある富士山本宮浅間大社という、平成 18 年に 1200 年祭というものを執り行った、非常に由緒のある大社を拠点として栄えたまちが富士宮なのです。古くは織田信長の時代に、市が立ったというところから今の商店街に至ったという歴史があります。ですから、富士山と浅間大社を貫きにして富士宮のまちは語るできません。

時代の流れの中で商店街が疲弊してきました。うちは株式会社きたがわとありますが、お宮横丁から浅間大社寄りに一本細い道を入ったところで、本業は北川製餡所という餡子屋をやっています。私は生れ落ちて高校を卒業するまでそこで育ちました。小さい頃はお浅間さんがホームグラウンドでした。今は公園になっていますが、かつては大きな噴水や遊具があったりして、幼稚園に入る前から毎日そこで遊んでいました。ここの湧玉池という、1 日に 36 万キロリットル湧いている、湧き水に入って遊んで宮司さんに怒られたという記憶もあります。そういうわけで、自分の生活の中にお浅間さんというものが常に一緒にあったわけです。

お浅間さんは富士山とセットになっていまして、かつては富士山への登山客がお浅間さんでお参りをして、富士山へ登る、そういうコースがあったわけです。ところが、車が発達して、直接富士山へ行くことができるようになりました。すると、なかなかこのまち中に人が見えていただけないという現実を突きつけられました。そして、だんだん人が少なくなっていきました。それをなんとかできないのか、ということが富士宮市、特にまち中に住んでいる人の課題でした。

そんな中でたまたま空いていた浅間大社の前の土地を、きたがわさんで何かやってみませんかと金融機関から唐突なお話をいただきました。そこですぐに「いいですよ」とは言いませんでした。そこが一つのポイントでした。やはり浅間大社の前で商売として餡子屋をやらせていただいている中で、その土地に住んで、そこで暮らしていかなければなりません。もちろん、まちの中に活気があるのが当然いいわけで、そのためには後ろ向きであってはいけないと思いました。そこから出てきた、何かやりたいと

いう気持ちを常々持っていました。ですからとりあえず、うちでその土地をやらせてください、という話をしました。まず更地にして、どういう形で、お店をやるならどういうお店をやったら良いのか、いろいろと考えました。結果、今のお宮横丁になったわけです。

そこへ行き着く過程ですが、うちは食品を扱い、餡子というものを作っています。餡子というものは、豆を焚くわけです。一番大事なものは水なのです。ここには昔から富士山の湧水があって、今でこそみなさん、ミネラルウォーターを買って飲まれています、この近辺には本当にいい水が湧いています。その財産を使って、餡子を作らせていただいています。うちの工場でも敷地の中から水が湧いています。その水を生かして何かできないかと考えました。うちは食べものの商売ですから、その水を使った餡子を使いたいと思いました。たまたまお宮横丁の場所に、井戸がありました。当時は使っていませんでしたが、掘れば水が出てくることが分かっていました。話を聞くと、そこには昔、豆腐屋さんがあったらしいのです。豆腐屋さんが、その水を使っていました。そこで大体の位置を探り当てて、井戸を掘りました。これがお宮横丁のシンボルです。おかげさまで、人がたくさん見えていただいています。とてもありがたいことです。そこでのポイントは、あそこから水が出ているということなのです。

今日のテーマの一つに、焼きそばというものがあります。何を隠そうこの焼きそばという産業を支えているものも、水なのです。先ほど鱒の話がありましたが、それを支えているのも水なのです。水というものを私たちは当たり前のように使っていますが、やはり私たちが仕事として毎日大量に使っている身近なものなのですが、お金の換算したらとんでもない額の水を富士山からいただいているという事を、常々思っています。人類の歴史を見ても人の住む場所には必ず水があるわけです。古代の四大文明にも川があったわけです。水が無いところには人が生きられない、これは誰が考えても当たり前のことです。そういう水を使って、人が集まれるような空間を作ってあげたいというのが、一番の出発点でした。皆さんは環境というものに対しては造詣が深いと思いますが、やはり水を生かした、単なるハコモノではない空間を作ってあげたかったのです。

お浅間さんには、今でこそこれだけ焼きそばがブレイクして、毎日何台も観光バスがまち中に入ってきますが、約5年前まで、当時浅間大社の社務所の方に伺ったところ、1日平均2台くらいのバスが参拝に見えているという話を聞きました。2台来ているということは単純に言えば、80人程度の正式参拝者が来ていることとなります。正式参拝というのは、社務所に行って記名をし、お祓いを受ける事をいいます。他に一般参拝という、普通に来て参拝するというものもあります。正式参拝で確実に80人~100人の方が見えています。しかし、そういう方が休んでいく場所が無いという事を、昔から思っていました。そういう方が少しでも休んでいける場所を提供したいと思いました。今、流行のバナジウムが入っているあの井戸の水を、ご自由に飲んでいただいて休んでいってください、という空間を作りたかったのです。休めば何か口に入れたいということもあるでしょう。そういうところから、何か食べるものを配置したらいいのではないかとということで、うちは餡子屋ですから、そこに甘味の喫茶を一つ置きまして、それからせっかくなので富士宮の産物を配置して、現在8店舗あります。その中で、焼きそば屋さんが2軒、お弁当屋さんが1軒、ニジマスを扱うお店が1軒、お土産物屋さんが1軒、それから豚肉を扱うお店が1軒、それぞれ富士宮の特産品を配置しています。かなり今、市外から来られるお客さんが多いのですが、そういった人たちに富士宮をPRする場としても提供できるのかなと思っています。

## 門前町の賑わいと商売

神社の前で人の賑わいができるスポットとして、いろんなメディアや行政の広報などに載せていただ

いているわけですが、なぜそれが取り上げられるのかを考える時に、税金を1円も使っていないということがポイントかなと思っています。土地の取得から建物の建設、運営、管理、そういったものには相応のお金がかかるわけですが、これをすべて民間でしました。これが行政に非常に褒められています。

当初、こういう事をやりたいといった相談で金融機関や商工会議所などに行った事がありまして、こんな補助金があるのではないかと、調べればこういう公的なお金を使えるかもしれないよ、というアドバイスをいただいたことは事実です。ところが良く考えますと税金を使うということはそれだけ責任も大きいわけです。責任を回避するわけではありませんが、要するに自己責任でやりたい事をやれるという捕らえ方をしました。とかく公のお金を使うと、何か一つやるにも審議をして、そこで承認をいただいと、とても時間がかかるわけです。ところが自分たちのお金ですから、やりたい事を好きにできる、その代わり責任は自分たちで全部負いますということで今までできています。

所詮、地方の個人商店のような企業がやっていることです。資金的にも限りがありますけれども、それをいかに効率よく回して運用していくことでその効果が出るのではないかと感じています。今、3年半経ちますが、経営的には当初思っていたよりもたくさんの人に年々お越しいただいている状況です。当初の目的でした、とにかくまちの中に人が来てほしいというところに関しては、微力ながら達成できているのかなと思います。3年半ほどしか経っていませんが振り返ってみると、ポイントになる部分は幾つかあるわけです。それがおそらく私が生きていく上でお宮横丁として進化していかなければならない、そこにおいて非常にヒントになるものを毎日もらっているのかなと思います。

お宮横丁が一つキーワードとして持っているものが、来ていただいたお客様に楽しかった、おいしかったと思ってもらえることが一番重要なのかなと思います。あくまで商売というものが絡んでいて私たちも生活をしていかなければならないので、やはり人が喜んで帰っていただく、ということはお金を落としていただけるという、これが経営としての基本です。いかに来た人が快くお金を使っていただけるかという部分では、経営という立場から見たときに、自分のポケットに入っている小銭で食べられるようなものを提供してあげることが大切です。やはり商売としてはそういったことに気がついていきます。生活をしていかなければならないという現実がありますので、いかに心地よくお金を使っていたらいいのか、そして喜んでいただけるか、それが経営をしていく上では大切かなと思っています。

## まちを知る

まちづくりというのは好尚なテーマで、今、全国的にまちを復活させようという動きがあります。私はお宮横丁というものを立ち上げてみて、おかげさまで毎日多くの人でお昼時を中心に賑わっています。しかしまちづくりについて、具体的にこれだ、ということなかなか言いにくいです。ただし、一つだけ言えることは、その場所に合った事をいかに見つけるかということだと思います。いろんな方がまちづくりをテーマに、いろんな研究がされ、いろんな話し合いがされていると思いますが、やはり場所によって全然背負っているものが違うと思います。今日ここで話を聞いていただいて、将来自分のふるさとを活性化させたいとか、賑わいを作りたいとか、実際に行動される方も出てくると思います。そこで一番重要なのはその土地の歴史を知ること、文化を知ることです。それが無いことには前には進めません。ですから先ほどの宮司さんのお話、分かりにくい話です。けれども、私もこの浅間大社の富士講青年会に所属しています。このお浅間さんというのは1年に300回くらい、毎日お祭りをしています。私たちはそういう行事のお手伝いをしたり、会員同士の親睦を図ったりしています。そういうものを通して、私は少しずつ勉強をしています。やはりまちをつくりたいのなら、まちの事を知りなさいというこ

とを言いたいのです。

まちをつくるという、カッコいい言い方はできなくても、その土地に住んでその土地で暮らすのであれば、やはりその土地の事を知ることが一番大切なのです。そこには風土というものがあるのです。習慣、慣習を知る。あと、その土地の人を知ることです。何も自分のふるさとに限ったことではなく、東京に出てきて勉強して、東京に住まれる方もいらっしゃると思います。学芸大ということで、多分みなさん学校の先生になられてどこかに赴任されるということになるかと思いますが、お店がたくさんあることだけがまちづくりではありません。やはり自分が住み、働く土地が、どうすれば暮らしやすくなるのかと考えることが、まちづくりなのです。そこで商売をやって儲かることがいいまちづくりというわけではありません。暮らしやすいまちをつくるためにはどうしたらいいのかを考えていけば、自ずと住みやすいまちというものができののかなと思います。私はたまたま食べ物を売る商売をやらせていただいているので、その食べ物を使ってどうやったら人が来ていただけて、それが自分たちの生活にはね返ってくるのか、という事を考えました。それだけのことです。自分だけが良ければ良いわけではなくて、やはり来ていただく皆さんが気持ちよく帰っていただける。それが大事なことかなと思います。

### まちづくりの精神

先ほど渡邊宮司も話していましたが、まちづくりに一番大切なものは精神です。人間としての、日本人としての精神が一番重要だと思います。渡辺会長がおっしゃっていたマスコミを使った手法は、さらにその上にある、技術的なことだと思います。やはり基本になるものは、精神性の問題だと思います。これがまちづくりということに関しては一番重要なことだと思っています。学生の皆さんは20歳くらいだと思います。私は40歳になりまして、皆さんよりも少しだけ長く生きているかと思っています。私も高校を出て、大学は横浜、就職は7年ほど東京で働き、それから富士宮へ戻ってきた、いわゆるUターン組です。一度自分の生まれ育った場所を離れ、そこに戻ってきたときによく分かります。

人の気持ちというものは数字では絶対に測れないもので、今では人の五感を数値で表すという研究が進んでいますが、人が考えているものや人の気持ちというものは、絶対に数値で表すことができません。ですからそれをいかにうまく自分の中で処理して、前に出すか。そういうところに力を使える人間がいかにいるか、それがまちのパワーになるのかなと思います。

みなさんそれぞれに個性があって、それぞれに得意な分野があると思います。渡辺会長は焼きそばというものを、突拍子もない発想でマスメディアに出すことに関しては天才的な力があります。そういう自分の得意な分野をいかにその町のために向けられるかが大事だと思います。私は食べ物を介して富士宮という町のために何ができるかというところで、毎日暗中模索をしています。どうしたら富士宮の食べ物を使って富士宮を売ることができるか、人に来ていただくことができるか、そういう事をしているのです。

たまたま食というところにスポットを当てて、「フードバレー構想」というものを行っています。富士山から湧き出ずる水とともに、富士宮には豊富な食材があります。その食をキーワードとして、元気なまちをつくりましょうということです。経済の活性化、産業の振興、安心安全な食の提供、食育という健康に関すること、それらを総合して富士宮というブランドを作ろうという、ブランド戦略に行き着いています。富士宮といえば食べ物がうまいんだぞというイメージを作ってしまうということを、行政が進めています。そういう中にも自分たちが今やっている仕事をうまく絡めて、相乗効果が出たら良

いなと思っています。たまたまお宮横丁というところは、食をテーマとした小さな商店街的な食べ物屋さんが集まった空間なのです。これがいかに自分の住む町に貢献できるか、そこがポイントだと思っています。

やはり自分の住む町を良くするためには、自分がいかにその町に対して役に立っているか、それを常に思う気持ちが非常に大事だと思います。かつて有名なケネディー大統領が言っていた言葉ですが、国が自分に何をしてくれるかではなくて、自分が国に何をやっているか、というものがあります。そういう思想が、私には心に響くものがあります。要するに、まず国と言うよりも、自分の住む地域に対して自分は何ができるか。宮司さんが俗化というお話をしました。いわゆる金銭価値に換算できるもの、それが今は価値として大きなウエイトを占めすぎています。やはりそうではなくて、自分の暮らす町に対して何ができるのかという思いを共有できる人が集まってどれだけいるか、そのネットワークを作ってやるのが、その町の力になると思っています。これはお宮横丁という小さな商店街をやらせていただいている中で、職に関係なくいろんな業界の方とのつながりというものが出来つつあります。そういうことに対して共鳴できる部分を持った人が、まちのためになっているのかなと思います。

### まちづくりは人づくり

ですから、まちづくりイコール人づくりなのです。人をつくると言いますか、自分を磨くということですね。それが一番大事だと思っています。多分、教鞭を執って教壇に立たれる方がいらっしゃると思います。私が一番重要だと思うのは、教育だと思います。それは大人も含めての教育です。私も子どもを持つ身として、やはり必要最低限の学力は必要なのですが、人としてという部分をこれから育てていく必要があると思います。宮司さんもおっしゃっていました。環境問題、地球が減びるのではないかと、そこに行き着いてしまうのではないかと思います。俗化、唯物主義、拝金主義、そういう聞いて嫌だなと思うような言葉が、今あふれています。そうではなくて、昔からある美しい自然の中で育った日本の文化、日本の生活様式といったものは、世界に絶対に通用するものだと思います。それを育てるのは、やはり教育しかないと思います。

自分が住む富士宮という町に置き換えても、やはりその市民のレベル、いわゆる民度をレベルアップすることがその町をそこに住むみんながつくるのだという事を、一人ひとりが感じられるような子どもたちを育てる教育が、一番のベースになっているのではないかと思います。まちづくりといっても具体的な手法とか、そういう話を期待される方も多いかと思いますが、私はお宮横丁というものを立ち上げて今日まで運営してきた中で、一番大事だと思うのは、教育だと思います。人の意識を変える。いかにその町に対して、もしそこで長く暮らしてきたのであれば恩返しができるか、またこれから役に立てるのか、そこをどういう風に考えるかは皆さん専門分野が違いますから、それぞれの分野で生かせるものを見つけることが大切だと思います。それが生涯通して町に貢献できる。学校の先生として貢献できる、お医者さんとして貢献できるなど、いろんな貢献の仕方があると思います。それを考えていくのが今ここにいらっしゃる学生さんたちが考えられることで、ぜひ考えてほしいことです。将来どこに住むかわかりませんが、まちをつくる、そういう力になると思います。

一歩踏み出せば、否応なく進むしかないのです。具体的な手法は其中で考えていけばいいのです。頭の中で考えていてもことは進まないのであって、とりあえず毎日生活している中で思ったことを少しやってみるのです。どこかで大きな勝負をしなければいけない時があると思います。しかし自分の意識を常に高いところに持っていれば、いろんなものが見えてくると思います。そういう意識だけ

だと思えます。

まちをつくるのは自分で、それは人づくりなのです。また、自分と共感できる人と一緒にまちをつくるのです。

**(質疑応答)**

**質問者 E :** お宮横丁に掘られた井戸は浅間大社に出ている水と同じ水脈なのでしょうか。

**佐野氏 :** 難しい質問です。正直言って分かりません。

**質問者 E :** お宮横丁の井戸は、どのくらい掘ったものなのか教えていただけますか。

**佐野氏 :** お宮横丁でご覧になられた井戸は、もともと水が湧いていたものです。少しずつ自噴していたものなのです。そこにモーターをかけてもう少し水量を上げています。私たちが自分で掘ったものであればお答えできるのですが、お宮横丁の井戸に関してはどのくらい井戸の深さがあるのかは分かりません。ただ参考までに、うちの餡子屋の工場の敷地にある湧き水は岩盤を掘ったもので、28メートルくらい掘ったというふうに聞いています。ただ、28メートルというものが浅いのか深いのか、どう思われますか。

**質問者 E :** 杉並の一般的に浅い井戸と言うものは、7~8メートル、せいぜい10メートルくらいです。10メートルくらいで礫層につながっています。

**佐野氏 :** もともとの地というのは富士山の溶岩がたくさん重なっている地域で、一つ層をあたると水が出てくる、さらにそれを掘るとまた水が出てくるという地形になっています。うちの工場内のところは、岩盤を3枚ほど抜いてあります。やはりそうによって含まれる成分というものは、微妙に違ってくると思います。お浅間さんの湧玉池は、本当に自噴している水ですから、たった一つの岩盤の穴だけとは思いにくいです。いろんな水が集まって、そこから湧いているのだと思います。あとで時間があつたら手を入れてみてほしいのですが、禊といいますが、今までなされてきたことが浄化されると思います。